

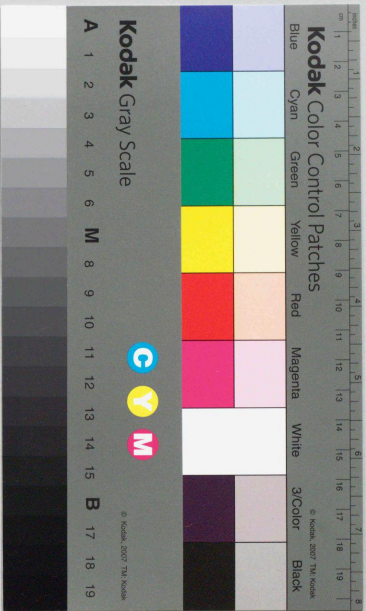
稽德編

三


稽德編

品名	文
冊數	1
日期	
地點	

280  
7  
1A-3




  
 齋徳編卷之三

東照宮第三

明治十九年  
 八月 點 查 章

和泉文化会  
 33.7.30 初  
 36252

天下の人を稱しつゝも 家康公は及んば  
 終る所を 智あり人へ漏れし 家康公所住  
 義の厚く 伊智急の海き事 甚すくもよき也  
 終る唐公知も昔より 日弁少て 天下と始て  
 平けりし 人等も好も 家康公は及ん  
 人等 凡天下と草創し 終る元祖公は希代乃

A 280  
 7  
 1A-3



英雄之於世也若多孫也人必其元祖の成法  
とく鴨守々失ふる時千世弟代長久  
是下之元祖の能法を於て新法改め何い  
老の基よりと 智ある人云り  
御遺訓附録  
下同  
一 東照宮の御言曰礼世武と嗜むものじ  
くそ 辟世(一)荒乃人ふとくくそを 考て余  
喰有くし 治世武 武道を嗜むと志の武道を  
好む人と云つる一と云信者周易法不困たむ  
可くと云ふも 戦と好む時を必立ふ天り安くと

一 とも 戦を忘る時ハ危くと云り左年の時ハ  
戦と忘る(一)まら武道を好む人くと 或人云  
り

一 又信者云く農工商の實あり第一農人乃  
昔ハ一粒百功とて去年秋より種成れり  
春ハ四成りし夏ハ草切り風年暑湿と過ぎ  
秋ハ苦骨とて秋ハ福とて(一)若とて(一)  
君ふより徳人と被ひ 農人云く莫大の苦骨  
又莫大の熱切より 世所不君子ハ一度飯を食

すやも民の苦勞と忘るは又民を希ふ也  
若しわがやと爲るは民を信ふ民の源  
成るは源一民は是の由之そを成るは  
不<sup>レ</sup>成るは國ありと成る

一  
又曰治國は武家の風公家の如く柔弱なり  
武道を忘れんとす治教と專ら我事業  
と爲るは家と云ふ者之世運成りて  
近代は西國大内東の上板<sup>新</sup>今川武と  
先ひと家のと成て云ひ之又天子ハ

後高祖院洛配<sup>醍醐</sup>帝い<sup>て</sup>是<sup>を</sup>式とす<sup>り</sup>後ハ  
即位と先ハ治教中<sup>大將</sup>武道<sup>を</sup>業内<sup>あり</sup>  
一戦打負<sup>は</sup>八罪<sup>あり</sup>嬰兒<sup>は</sup>忽死<sup>す</sup>六  
七事<sup>は</sup>の<sup>う</sup>修<sup>め</sup>我家<sup>ハ</sup>武道<sup>ハ</sup>業内  
成者<sup>ハ</sup>大小<sup>上下</sup>も<sup>ハ</sup>是<sup>と</sup>國<sup>ハ</sup>元<sup>武</sup>道<sup>ハ</sup>石<sup>尊</sup>  
者<sup>ハ</sup>和<sup>と</sup>志<sup>す</sup>和<sup>と</sup>知<sup>る</sup>者<sup>ハ</sup>義<sup>理</sup>を<sup>し</sup>  
義<sup>理</sup>を<sup>し</sup>者<sup>ハ</sup>虚<sup>言</sup>多<sup>し</sup>虚<sup>言</sup>多<sup>し</sup>者<sup>ハ</sup>必<sup>臆</sup>  
病<sup>あり</sup>心<sup>ハ</sup>驕<sup>り</sup>安<sup>く</sup>驕<sup>り</sup>安<sup>く</sup>もの<sup>ハ</sup>安<sup>し</sup>  
の<sup>新</sup>士<sup>味</sup>方<sup>と</sup>成<sup>て</sup>ハ<sup>多</sup>く<sup>ハ</sup>逆<sup>心</sup>と<sup>なり</sup>



敵と争りて死せざるは

一 又曰大將ハ文武一致を期り軍法ハ二字ふもと  
ついで政道と立名家職と能動との用印  
一

一 家康公ハ四民とも家業と勤者と好む  
然る農之高も務れざる者少く 御目見させ  
給ひ之又諸藝は后人と賞し給ひ何の  
藝能少くも能者の二つとれざるは思ふ所  
又法道の名人も敬ひし之

一 家康公の曰ま君と一臣は度なき討つ家  
と先不臣下君不似を多し時を臣必去不臣代の  
讀不関東小千葉を原 原小高木と千  
葉ハ主をれは飲地五六萬石原八千石を原光  
をれとも二十萬石高木ハ原を原光をれとも  
二四万石知行せしと之君臣三人の領地合て  
百万石少知りしなり是と千葉一人少徳  
しと之君臣とも立ふ。さふ君臣上下の次序  
乱し一存悲しく滅せり 君威路と去へる

臣の威勢を恐るまじく

一 家康公御先祖の御政道才より少遠に成  
されば若し又別不獨はて能申の也若し  
政を改修ひし之甲別に入修ひて武田の  
家法と少異ひ國東御入國此時小繼此  
家法を用ひ修ひし之民志よりひそくして  
國連不治日只年貢の納め申さるる他家と  
修ひ可修ひ他所と御領分ふ之故之民  
忽思ひ有らば古例を守らば勿論よき事なれ

とも若し古例の悪き我用の悪き事古例と  
破る非ず古例ふかりしも亦非之とも修

古例

一 東照宮竹代極と申すは此尾州熱田の

所人黒鷲といひ小鳥といふ事とよくは成  
成上りれと直習れ元老若と申す智の意と  
すて感ふ堪ふなり修ひ不竹代極修成  
さるハ修成小名御満是と思ふこれゆへに是れ  
名は汝不修成といふ故の事持論りゆへに御意



世間人を指し、何とていふに  
是れ也と道智流中言れども信不世智、多きこと  
言はざる為そ人と拘るを前用する者も多し  
大なる智急を有する者不己、智急を思惟せ  
て大將も有る事ありとありと、信不これ不  
自能くし、すなわち黒鶴は己の音をきく者之  
と、や誠小梅檀二葉より香りを松ハ寸  
ふられも棟梁の性ありとそふと是之とて  
少智急と法人感——有りとも有りや

一 或人の物語不秀を云此曰藝能人の傍よりて  
入事も入る事あり、鐵田常三ハ茶の  
湯歌道謡評為り登上の遊びにや、や風流  
の事ハ凡天下ふまひし物也と武道の  
事ハ信長云の切て控後ひし凡のさき程も  
而——彰庵云ハ、や風流の事又ハ法  
華不空佛法をれも、武道の達人も國家を  
治る事ハ凡我朝の事ハ及んば、吳國も  
稀哉——是と万能一心万應一徹ふらむ

としをて 宣入り

一 大園秀右大坂千貫夫倉少 内府極少家

中の馬をもと少後有し何事も思ひの装束  
束まををみつきり然り所小大園の位も黒  
の馬小紅の鬚浅端幅小舟も何と中侍と  
少為あり成瀬小吉と中吉ありと中吉  
所止何程の者りと為る也銘ひふ二千石と  
中吉。相り。さとの名我小位へふ菊石も不  
為る者をもと位も内ふ 内府極少所望

有るれと少交合。成少吉と云て少新の位と  
太園(才云小舟出り)と少後。附ふ小吉。後と  
中吉。あり。中侍。才。中吉。あり。少。在。り。新。も。八  
左。根。ふ。右。根。あり。心。成。心。し。身。命。と。石。願。す。と  
中。吉。ふ。右。根。の。中。吉。心。外。れ。不。ふ。右。根。も。是。淋  
止。極。く。少。止。け。成。少。切。腹。下。付。中。上。誠。不。畏  
切。る。氣。色。少。く。涙。成。ま。う。く。と。少。り。と。れ。る  
内。府。様。御。意。ハ。少。あり。主。成。不。あり。才。秀。右。云  
は。石。出。り。て。五。万。石。と。少。不。と。の。少。内。意。可。れ。と



誠不亦事之上上言不恐ひのる上の沙  
字不叶ひ汝又沙讓申あつた方より我々の  
能く之の上上言漸二千石与(重く)て汝の  
立方の為にも莫大の事之沙讓申(申出さる  
中)ハ我の何れも忠誠を(守り)たり大忠之  
と申言ふ事と居る道(御守)けられ(る)も是非  
之誠より自害(作)つて(思)ひ切(る)る我(沙)讓(し)  
有(道)是(非)不及(る)世(任)事(を)修(せ)り(と)  
秀吉云(上)言(不)彼(い)ふ(る)を(さ)す(る)有(る)と

思ひ沙(不)言(は)成(ら)ぬ(と)内(有)る(能)人(を)持(て)進(ま)り  
同(く)け(て)使(ひ)多(く)修(せ)る(道)第(一)を(後)  
内(有)る(一)秀(忠)公(は)此(中)と(沙)集(め)る(は)れ  
少(吉)と(御)前(へ)石(田)元(佐)と(進)む(る)は(汝)志(の)  
誠(中)と(成)る(汝)心(決)す(と)修(せ)る(尤)我(心)を  
守(る)は(汝)と(上)言(ふ)中(一)是(前)より(修)る(は)  
と(上)言(ふ)は(力)を(誠)汝(新)に(申)し(有)る(は)と(上)言  
ふ(は)中(有)る(を)家(之)友(者)程(倉)比(は)使(ひ)多(く)  
秀(忠)中(一)と(沙)讓(申)入(任)居(られ)又(修)不

孔子も生國魯の國を出た所阿谷遲々として  
去り終つ又齊の國来て大丈れ位をやり  
とて金不入る。是れは世の例をささててか  
とて世をも入る言ひき。終ひて世話も  
故郷忘れしとていり。名教を刺傷する  
所を離れくささといふ。又貧乏もあつて表  
ひる犬と見せしめもあつて飯食をささく  
食せしめしむるといふ。此の決意とてけん元の  
貧乏もいふといふ。畜類といふ世況や人かたて

とて只家小の教者といふあり。尤本骨の義仲  
少つてし。敏海の忠をささてて狼をささく  
世も夫のまれの小言の志満足不足といふ  
世に世の御成と見せしめ。世に世に世に世  
地のは世といふ。世に世に世に世に世に世  
とて世に世に世に世に世に世に世に世に世

一 或人の物語に曰。驕る大綱言。旅少知少の時。國松  
極とせしむる。相國秀忠公。け代とせしむる  
とて世に世に世に世に世に世に世に世に世



光極あり 御國極と雖の外 沙籠をさす  
東照宮同それ或阿と信あり 竹千代國社  
之殿敷面せむる者兄弟同遠あり 出らぬとの  
上意あり 竹千代極御國極行同遠をこれ  
東照宮(沙籠より成り)と 上意竹千代殿  
是よりと信沙籠より成り上殿へは信し  
之成り成 竹千代極沙上殿へ沙籠より成り  
御國極と信ひて御上殿へとんと信成り  
東照宮の信ありとありとありとありとの

上意ありとと下意ありとの信ありと餅あり  
竹千代殿(まつとせむと信より上意ありとありと  
くつせむとの上意あり 又竹千代殿信の成り  
是の上意あり沙籠の成り沙籠の成り何と  
いこれ一何是とありととて沙上殿の成り  
是これ餅と沙籠のみ 成り是くつとせむとの  
上意之に成り 又竹千代殿の成り何との  
上意の御國極信の成り沙籠の成り何との  
入りとと信ありの上意ありとありとありと





やうなるそと竹下代少将の才才同前より  
人を撰り守りて是終に彼時、たりも  
常世も太平よりきく誠ふ至年の苦業も  
いり、又一生は風れ箭の燈、大下事ん  
春の夜の夢もれも我身の業并と求のす  
天下下氏の才をささふ思ひ私欲を去るを  
さけ子孫長久の計とす。終に竹下代少将  
明將軍少将より、我見を祈ありと、後にも  
あれも、お玉極老も角と上意を畏くると

位より進み後程を経て又竹下代少将の才  
上り進み、自ら進み、竹下代少将一家老  
との誠私所為は、酒井雅樂成法、是亦備へ  
弁大炊と諫言の位とす。青山伝老を傳  
少将より、その才、何てあり、やと、は、上り、これ、ハ  
東廻宮上意、一は、元て、之、竹下代、とも、彼、亦  
三人、不、徒、これ、服、より、何、依、の、事、と、す、も、少、か  
石、下、入、彼、亦、三人、一、同、より、守、り、す、と、す、も、少、か  
竹下代、ハ、明將軍、亦、成、下、の、竹下代、事、ハ、善





謫ていも何ぞを信置されし言なりと申上  
らる上意不明の事まはれ定て日物と  
撰ひしるる少くはくきそ 秀忠の内意を  
雅樂次と傳へ不備(下)と申す仁とて  
そとてよ 大炊六郎とて諫めし仲孝六郎と  
以て守りし女ふ三人一小和同一く諫言せよ  
女ふ竹代と我風儀と云々守走(三)と  
思ふはは急てし中々急と萬の根元と  
しそ風儀をす少(四)と云ふあをそ妙意と解て

いふ我を室の蔵して金世や 秀忠六郎の蔵  
少上性有り竹代之辰の奉少て火性之人の  
性也有と大方性心そ我性金よりとて秀忠と  
金ふせんと思ふはくもりしるるそ性心そ人の凡  
儀も俄ふまかり雑きとのそそ性也有不誤て  
昔彼を竹代せよ貴一の肝要に武名の高き言  
るそこれそ人の自命の生死と云ふ不誠と有て  
ちくひ一寸の中少く知くはく武家不武名高き  
人命の死脈と知るとはは市も推し置を威

故に後しておとさるる詞とくは  
竹下代極 御前大徳氏 伯耆守出之と申し  
海とつる森彦といふとあまのりゆと云ふ者  
昔は 竹下代極を就 少事有る所自と眼  
指と少次へしけ 大なるおとさるる少勝の上  
といふやと云とけ 成敗は成しけと云ふと云ふ  
少と云ふと云 彦と云ふと云 大徳氏 云ふは合  
はして内外先改しけし 彦と云ふと云 彦と云ふ  
伯耆守帰宅の時を御酒の少事と云ふと云ふ修し

雅楽細者といふやうに仕めて八中へ所命つ  
ま難く西彦は一重酒一世の榮花と云ふとて  
御酒の少のひて少なり 折と云ふを伯耆守  
中少<sup>修</sup>徳を主とて西彦は少と云ふと云 推由極の  
取らるる御前小八何と云ふと云 彦と云ふと云 伯耆守  
中少<sup>修</sup>徳を主とて西彦は少と云ふと云 彦と云ふと云  
らうと云ふと云 少と云ふと云 彦と云ふと云 伯耆守  
明君と云 右の如くは彦と云ふと云 彦と云ふと云  
と云ふと云 家光公八明將軍と云ふと云 彦と云ふと云



一  
いり世阿弥 家光公は竹千代と名りしより  
相國極は他界の存雅樂以を西の丸(少後)  
と成す 家光公の少後見あり 雅樂以遊を  
前ふく 権威と大徳以く譲りしを喜の人はと  
而して 御氣滞りしよりと云へり是細川  
頼之が行ひ 例之大徳以八酒井濟安寺ふ威  
と譲り 濟安寺は河内寺ふ威と譲り 後ふ威  
より六百年と能くより 之の初より日中をこれ  
くまき月滿れそむく 御氣滞れそ衰ふらん

天道の常より 何れの序功とより 有るを  
しり 世言はりしを 春あてハ ねと云ふ 夜は後  
りて 春夜ハ 止まらば 秋ふ 譲りて 春  
秋も 又の初 功成を 遠く 助退く 八天の道  
より といふは 意人の 道も 又の初 成(し  
ぬ 初より されそ 更く 春の 初より 初又 初春の  
家光公 御代 少より 通塞 少く 終り 好子 是  
青山 因幡 公六 大番 以少く 三子 石より しか  
家徳公 七歳の 少時 家光公 少前 因幡 公

百之れ伯耆守忠信の事今漸思ふべかられ  
たり 母の伯耆守我少のこし 松平竹久代  
家綱云 小寺公仕のこし 信長信則より 四弟石  
山小室の城より 足成世有伯耆守方より 傳へ  
少との上意より 沙渡と信より 誠不伯耆守  
千代跡の巻れより 少は忠信とを 此支物と  
諸人より あり 東照宮御息所先代 遠六臣  
お玉孫沙眼力未弟と 御見重より 足成世有伯  
大炊氏伯耆守三人一和せし 忠信私と

高野

一 東照宮御末朝の時にお玉極と 少あ名將軍  
我最期に 早通身より 天下を何と 心得て  
弟と少信を 相國松平天下の 命とありと  
少信より 少御機能とありと 海より 母傳より  
との 上意より 少松平 家光公と 百之れより 方  
後より 天下を 主と 天下と 信より 是恩とあり  
上意より 少松平 家光公  
一 家光極少知少の時より 少御末朝より 二十



蔵の内外ハハ沙元氣甚盛なりて概々意ハ  
成或ハ所或をわうらん坂なりハ沙出遊其  
たりと之をうらん坂と切切度ありハ之  
少飲するハ雅楽以ハ大徳氏伯耆守三人ハ夜の  
目と云ハ氣をひ大くさすす物也

東照宮御賜力浅くハ 家光極少氣質

すあらふけ意悲深くハ 右三之流一和ハ  
守之ハ外ハ 逆ハ明將軍と云ハ也

一 浮田中納言秀家滅亡の事浮田家と云ハ

忠臣ハ忠誠前守長和又爲なり然る又爲ハ  
死ハ之ヲ長和能得守トシテ者希代の大偉  
人也未人の言ふ不出る事ト云ハ也  
程の物知あり者なりハ 秀家之ハの叔父家  
老なり抑秀家云文祿元年朝鮮ハ征伐の  
時毛利浮田大將なり然るハ釜山浦ニ忠誠  
前守死ニ事納言及ハ 秀家誠前ハ枕と云  
居ハ建何ハ少くも思ハりハハ少ハ一ト  
ハハ希也誠前守何ト云ハト云ハ也





浮田の歩竹の者ふ中村治所其居といふ者有  
世者哉長船秀家此若く此まし三才三七知  
行二千石賜り是又小出氏今なり長船ハ秀家  
少なり中村と長船ハ成下と無志之秀若  
公ハ他界のふふつと秀家ハ家老とも是公  
世儀あやふふより長船少く毒とありて殺  
すり是浮田のめと家老も深く歎くなり  
物も受ふ中村二前其居四人ハ家老の事と印  
とさへ入るる秀家四人の家老共と思ふ事不

事大形もくす世事世ふくもくもく成  
者や書さたりせん

打わりてはる道廻りの備前評

つらやのふとより志んとせよ

と書て秀家此門ふ三より秀家いふあり  
強ん石田中知少く浮田左京と平川妃  
海と徳吉院少飲けられ是飛箭と花房  
志麻の増田若夫の耐少飲けたり物も四人の  
者もこのむそふ世に出入り内府極少方

あり程きく関ヶ原合戦ありし小治田一萬  
二千成りて玉陣一後ひくたるく一變一  
戦中も 兩為りて忽敗軍し 主後三人少成  
御人少を成さるれ八丈の流れ流人と成世ふ  
哀さる有ねなり 秀家或時八丈橋まで  
親苦の高きふ 花房志摩り可成て年の  
飯と食て死後とのさうさう風の使ふ不  
志摩りて存の申言去致し 志摩方より糧  
弟と年々送り 弟の諸人志摩り志と感し

中納言家秀有ねいこうきと 癖を備へ人  
とあり 又天道のいまあ 明日より 忠臣を  
四人と追ふひれとんか せ浮田の家と奪ひ  
んと心まを 長船ふたつとれ 國中志く若  
しめ後々 天罰より かつ思將の成るるを  
末代のをいあまを いふもあり  
東照宮信公我治教少補さうも 秀家勢怒  
さうもあ四人の者とも 今のめく 女堵さくし  
さう細道く一たの成思ひ 志を二の晴音の



秀家の人数と虚不申ハ石田の武道之業  
の成より大軍也也愚者の兵不備し小  
軍也也良將の兵少く願す一者とんず  
せし四人の者もハ浮回る再自鼻はより人の  
家と人の所少くして見よ心も主君服  
再鼻はも家元より也是とて諸士と云ふハ  
是れ分の兵より物も同不物と見て心不  
つく心付心も知と申す再鼻はと聞て心不  
出くる心も知と申す鼻は香と云ひて

心不告の付も知と申す色聲香味はのにおと  
ん中力もかし、味ひて之を事と再自鼻は是也  
少勅のさしとら人の常そ再自鼻は世に聞え  
方心も之有るも何の後少も之より妙く忠  
田ん人数多く物知と申す再自鼻はも之も  
如く秀家愚者人少く長船ふたやうなれり  
そ大將も者少く一詮我生もふん付ひる白  
者を使し時を思ふとて一玄宗の安藤山道く  
石田も之を考ふ諸人の皆くつ希我をり

智恵者と思ひ諸人の言ふ事とを用りて我  
氣不入る者一人の言ふ事を用り我人少くあ  
るればひそひそに我者少く入るを傳ふ  
ゆへ能く入るの方々をさしはる事なり  
目とる良薬も不入る耳や小鼻も不入る物也  
少く入る不入るは是れ存るは之存るは  
存るは是と用る人の道も能く未だ能く  
へる唯自りても鼻あても一ツまうりと重寶と思  
ひ之外の耳目鼻口舌も是とすつるにや

心の大将と成て耳は鼻舌も是と治すゆへ小  
人の大將たる者能く治すゆへ一ツ我氣も合  
さる者一人も能く治すゆへ我と夫れを家老とい  
諸侯人をも人皆他人の壽命も入るを能く治  
す我も不入る我能く治すゆへ世の中を能く治  
す將の心一ツして能く治すゆへ一ツの本も夫れ能  
く治す事と能く治すゆへ一ツ良薬の薬と用りゆへ  
夫れは薬料と能く知りて用り能く治すゆへ一ツ  
一ツと能く治すゆへ一ツ能く治すゆへ一ツ能く



前より良薬と風ひとて長私紀伊と云毒薬と  
うけ給ふ家と云一者と昔の東氏の悪意と  
滑りハ先志と不忠とを取違へし一府之忠不忠  
とわきまへし只愚将あり忠不忠とわきま不智ハ  
明君之よ上意之先誠不主徳の格言末代と  
の毒世と云へし浮田家不仕へし浪人のお  
濟不純伊守ハ艸多の者して中納を此れを  
志ありつと置りり何とそれぞ我れと  
中納言風ひ弦つととて一度ハ涙と流し一度ハ

怒り彼御誓文と少志也又奴也夫とてハ天  
命以て言敵とせえ秀家愚者日人光紀  
伊守と恐れ能伊守次方小せとてり備じり  
同類一時の者と不割秀家の道不主ま一  
味の外れ者を一言ともしや中納言其法家中  
あはれ世と悲しむも言りや只そとや  
ささるるうり之紀伊守は横目身名れも流しハ  
是れぞ小松それ父ハ子と松を中納言不敵て  
家中の風後悪く表裏多しとて心口と相

悪せを國を原すも彼紀伊守ふくせし者  
ともら義の道を教へこれとも彼を挑成して皆  
時中逢ふれを先もと聲を先陣とせし世者元  
先も敗せしりと聞しをも早く崩進切腹  
左流陣の曾古を我より少敵又吾家の近  
習ふ者も大方紀伊守一味をりしり皆を  
君を捨て敗ゆしありあり家運の末はハハ  
ヤウと思ひの外なるを教へて渡と流し流り  
より又老巧の士は樹判武家軍兵ふ悪敵と

かこきとハ大方の邊ひよりこを原を國を原合  
我の時分鴻津と七千の人数なりしとも  
を不薩摩の川とくを立花統千二百の人数  
少そ能成すし川とくを浮田ハ一萬二千の人数  
と揚すし一日の内ふ主従三人少敵を郷民ふ  
をこれ近國の備前もて川とく事なりしとて  
世不渡よりま有ぬとも常く思ふすく大  
才と言渡して弟我佐成成之我佐成家  
職武道不悪敵成之四人の敵老せめて二人成



と有りて敗軍とすとも備五年ハ  
と重 東照宮ハ沙都リトされゆく程ハ  
成行まゝ不ハ浅キキ奴ハ末代の將  
是我(同)身戒トシ給少慮ト云ヒテ秀家ハ偽不  
小人ハ任せら也ト云ヒテ長祢ト云  
秀家ハ心付ハト云ヒテ内女ト事不  
背ト云ヒテ哲文ト云ヒテ秀家ハ  
世哲文ト云ヒテ何事ト長祢ト云ヒテ  
ヨリ長祢ト云ヒテ人ノ命ハ不足知テ

との也死テ後ハ秀家の事ハカギト云  
ト云ヒテ忠義不ト云ヒテ云ヒテ四ハ  
家老を始メ能ト云ヒテ悉クト云ヒテ末代ハ  
大將心付給少慮ト云ヒテ何程ト云ヒテ思不  
ナリト云ヒテ能ト云ヒテ先ハ君ハ大敵ト云  
不ト云ヒテ人ハ君ト云ヒテ人ハ臣ト云ヒテ  
之方不陸テ平昔不任少慮ト云ヒテ又抑テ用  
少ト云ヒテ秘事ト云ヒテ傳是アリ

一 相國秀忠公御老中ト云ヒテ石寄ト云ヒテ福徳

在る事申上<sup>二</sup>而<sup>一</sup>あり<sup>レ</sup> 控現極上意  
ありし<sup>レ</sup>つゝ<sup>レ</sup>考ふ<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>慮<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>當家<sup>一</sup>對し  
忠切深<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>忠<sup>レ</sup>なり<sup>レ</sup> 控ふ<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>威<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>修<sup>レ</sup>者  
之<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup> 御前<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>御前  
諸君各目<sup>レ</sup>目<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>合<sup>レ</sup>七<sup>一</sup> 御不<sup>レ</sup>御  
御後守<sup>レ</sup>護<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup> 在<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>發  
御當家<sup>一</sup>對<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>先<sup>レ</sup>舟<sup>一</sup>の<sup>レ</sup>忠<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>石  
田澤山<sup>一</sup>帰<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>の時<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>夜<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>石<sup>レ</sup>田<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>對<sup>レ</sup>  
り<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup> 控現極<sup>一</sup>し<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>危<sup>レ</sup>福<sup>レ</sup>極<sup>レ</sup>なり<sup>レ</sup>事

加<sup>レ</sup>卷<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>計<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>田<sup>レ</sup>甲<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>守<sup>レ</sup>護<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>當家<sup>一</sup>對<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>  
馬<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>なり<sup>レ</sup> 世<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>番<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
此<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>吾<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup> 依<sup>レ</sup>存<sup>レ</sup>  
之<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup> 依<sup>レ</sup>治<sup>レ</sup>教<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>補<sup>レ</sup>沢<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup> 歸<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup> 依<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>河<sup>レ</sup>皆<sup>レ</sup>友<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>  
布<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>跡<sup>レ</sup>跡<sup>レ</sup>因<sup>レ</sup>念<sup>レ</sup>侍<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup> 少<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>  
治<sup>レ</sup>教<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>補<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>送<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup> 又<sup>レ</sup>因<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup> 尔<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>も  
馬<sup>レ</sup>田<sup>レ</sup>甲<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>守<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup> 在<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>當家<sup>一</sup>對<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>け  
御<sup>レ</sup>本<sup>レ</sup>陣<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup> 依<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>存<sup>レ</sup>の時<sup>レ</sup>忠<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup> 備  
後<sup>レ</sup>安<sup>レ</sup>藝<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup> 依<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup> 依<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>秀<sup>レ</sup>頼<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>徳<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>り





してよきとありて彼水と切り又備後  
より學の表とすらん出を存せり我ふ  
他より大存より上福より學の表より  
至るより上を衣恵一事と則ち備後不  
柄とすし祈の表同を呼ぶ也服能く表と  
うさる事恵とて學の表より  
ゆせ大舟の流あり自身只水中に棹す  
し満人は思わぬ實教を彼何人の利  
ありて僧とありてん何そ能くうさるや

の世中いくつと不教と知る備又家来の  
傍と大小とすく答の教をすさき我心不  
少し念ふれを忽教し或は打擲すや  
一利欲深く明善利分の利欲あり  
の事なり世原不而此人民を愛んす下民  
又我ふ何そん事なり少一の邊  
ありてありて自ら死して死す或は  
水不入或は自害を誠小鷹の傍に不難く死  
世をのれ退く下民の世より能くも痛し





む交為ふと極なり有極危角いふべきやう  
なり之弊の之道人我ふ切ありとて之俟して  
置時只備後安慶尚書の人民天道を恨むの  
とのそ夏桀桀王我此ふ言慢して我世長  
久きん事天の目と回一着天此日亡ひ我  
亦も亡ひんと云ひふ天下の人我此と之して  
なりとも樂ら亡ひん事と歎ひしと之極の事  
少て民の心を能く道我天下れまことて之弊の  
悪人と云ふ時ハ天を我と亡し終つて世ハ

さるハ我汝未也とてまう世道不汝も世道を  
以ひ人民罪なき我と恨むの時我又汝もと  
亡き候て有きり天道我ふ天下れ控柄と  
歎け終ふ我不忠者とて悪人と云ふハ天道  
忽控柄と有し終ふを爲す我ふ志賣の忠臣  
なりと先言し天道を以てて天下れ太平と  
しそ思ふ層も不居ハなくして民を苦しめ  
忠臣不みん尤爲る安尚家一切有り武勇甚  
他不敵なり然れとも天命ハ背きくしよの



御内意不<sub>レ</sub>テ沙度り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>おれ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>謙<sub>レ</sub>ふ  
た<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>玉極の<sub>レ</sub>沙事<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>御内<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>  
て<sub>レ</sub>更<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>減<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub>  
意<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>更<sub>レ</sub>武<sub>レ</sub>骨<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>沙<sub>レ</sub>氣  
を<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>テ<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>理<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>沙<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>減<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>實  
と<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>種<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>故  
其<sub>レ</sub>前<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>種<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>餘<sub>レ</sub>錢<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>り

一 丹伊掃部次家老密本半助 或肘穿少於不  
掃部次(ト)も<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>沙<sub>レ</sub>氣<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>悟<sub>レ</sub>肝<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>て

以<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>沙<sub>レ</sub>家中<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>常<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>儉<sub>レ</sub>約<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>因  
窮<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>平<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>迷<sub>レ</sub>惑<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>俄<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>不  
成<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>尤<sub>レ</sub>殿<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>監<sub>レ</sub>固<sub>レ</sub>不  
成<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>家中<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>諸<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>(  
と<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>保<sub>レ</sub>儉<sub>レ</sub>約<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>守<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>蓄<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>成  
と<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>掃<sub>レ</sub>部<sub>レ</sub>次<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>武  
士<sub>レ</sub>北<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>殿<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>常<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>儉<sub>レ</sub>約  
と<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>謙<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>耐<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>所  
の<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>料<sub>レ</sub>理<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>川<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>り

八王寺少てはいふもさむひなり是

東照公常の上意ふ所と信じて人の心よこし  
世にせむはと尊とてかくの如く我は小僧  
うら幸八家中の者ふと信ふはたよと云ふぬをそ  
む人の世道有一極ふはたよと云ふはたよと云ふ  
さると有とのなれも世道とて信ふ法友  
数多きハ惣てそ千の内より百たよひ百のうち  
より十より一と云ふて肝要なる事と法友と  
せよと云ふはたよふ法友とあせえ家中せたく

なりぬそ人々の守り能きと云ふと云て人の  
心ふそむのうら幸ふ法友と云ひ月自く勤むは  
家中一和していひ事なるもの今附の上極一  
御字云そ今友澤の帰り法友と云ふて  
玉中小僧と云ふはたよと云て云て帰る  
入城の日道少てはたよより供出でせりよ法伴  
と云く呼ぶは本綿布子羽織数多布子  
家光出以人と娘の右の布子羽織と云ふと云  
少てはたよと云ふ者一我は親ゆゑと云ふ日夜





者一色中 米又湯漬と云ふ時 焼味増  
たり之 之事の喜して 沖路 敬取を常  
儉約とありて 固窮正れを 俄の事小臨て  
用少く思ふと たりたり 其後 掃部早朝  
より 在りふと 出 時或侍の 座行 せり  
きり 扇友ふと かりきり 色白き 甲馬の湯尻  
ひて 居たり 世屋敷(馬と云ふ) 入 たり  
之を 聞せ 留候 百六拾石 取たり 世を 正し  
知り 如増 百六拾石 取たり 時 座 たり 小 家 在

元 普 教 して 人 馬 州 宗 之 可 持 一 二 三 五  
感 じ たり 家 在 たり 奇 番 あり 自 然 の  
事 の 何 ぞ 家 不 幸 出 たり 一 二 三 五  
也 家 作 分 隔 あり 統 攝 せ 者 不  
首 尾 あり 者 不 有 たり 者 持 普 教 宗 元 たり  
夫 たり 家 中 奢 り 志 あり 今 天 下 小 倉 登  
と 河 げ たり 然 れ とも 嫡 子 親 直 事 八 掃  
部 正 宗 の 刀 小 丈 又 切 たり 諸 人 あり



一 上意不義元他界をくそ今川家の破滅に  
一 氏真胡多の好み定家家隆の秋合  
古今源氏物語の跡の沙汰或阿の京方の辰  
人御出立あまそ浴中の遊女白拍子あり  
歌兵庫たよりふ心くそ武道の土をきて  
不兼内なりと 君臣言行録  
下同

一 慶長中 所司代 板倉休賢守 奈良佐渡組  
馬奉行 大之保石見守 信人子後  
六家勲純 諸代友奉行  
長坂小刑於界改所 並次法若為且沙家老々

本多上意 以 為友 常 刀 杖 鐵 茂 助 威 儀 集 人  
御用人の松平右衛門 更板倉内膳正 秋元健馬守  
戸次公水井 右と更山城 和泉守 兩尾隱信  
沙相伴虎八 南光坊 傳長 光山 禪圓 水之殿  
一 秋元は雲小 是道 阿保 若羽 半入 谷音 阿保  
能替 拾遺 曾 猪子 内匠 堀田 若狭 曾 之 右  
の如く 御心 安く 海山の 沙世 光中 ありしと  
の端 冬 落書 たり 秋木の 中 事 あり  
関右 さん とも 沙 相伴 虎八 御心 あり

一 永祿四年 水野下野守より 信長と書中叔人

事とある。老臣等評儀にて曰。廣忠公、義元の公抱ふ似きれども、元康を十七年、以て弟三河と押合し、是時、の面を乞ふ、不立、是時、若奉の時より、大事の軍、小向つせ、是、今、度、亦、九根の先、不押、又、信長の先陣、大言、不働、と、同て、大言の、其、毒と、落、望、以て、早、立、命、す、と、も、ん、との、事、な、れ、も、選、て、信、長、義元の本陣へ、池掛り、義元、生、害、の、只、義元、常、の、

於、智、河、の、原、之、と、申、せ、ん、 抑、君、聞、も、又、強、中、也、侍、の、大、中、の、所、向、ひ、先、と、も、た、不、他、の、公、あり、去、り、う、我、知、女、の、内、者、每、夜、先、と、向、て、是、正、半、討、死、せ、う、せ、を、り、と、我、曲、を、う、と、言、ひ、所、候、と、廣、く、を、後、へ、と、言、人、感、服、ふ、と、申、ひ、り、

一 天正四年六月六日 酒井雅楽次正親率、病、病、者、時、自、ら、訪、ひ、給、ひ、御、中、つ、く、御、筆、を、賜、つ、て、思、や、り、あ、く、を、仰、も、悔、く、事、を、う、迷、言、ひ、度、き、の、方、 上、書、あり、正親、御、慈、情、の、厚、き、と



許して正親の嫡子とす

陸奥守言忠と号す  
次

田与吉

陸奥守言忠と号す  
次

我御前不呼申して正

親と上りて我思ふ事他を一切子君の如

き憐れう者々忠義と号し其器不偏てまじ

共事と承ふ別語一語ひ平定せぬ親を

とて正親の病中少く置うぬ給ひて還

はりの之後を臣等忘て屢彼の病を問せ

給ふ

穆德編卷之三終

